いうことは実際に信仰を持っている人たちが（もし考えたいのであれば）考えることであって，外部の人間がどうこういうものでもない．実際，島の人に，オルケスを呼ぶことはなんとなくムスリムらしくないような気がするのだがどうか，と尋ねてみたこともある．それに対する返答は，「オルケスを呼ばなければ何を呼ぶのだ？」「格好がつかない」「けちだと思われる」というものばかりであった．聞き取りに出かけた先で，VCD（Video CD）でも見ようか，と誘われたことがある．その家の夫婦と近所の人たち（全員メッカ巡礼者）と一緒に，ゆでピーナツをかじりながら見たのは，メイド・イン・ホンコンのピンク映画であった．

本で読んだムスリムとは違う，この島は特殊なのではないか，と当惑したのは初めのうちだけであった．今晩のおかずを賭事の景品にするような主婦たちがいる島に長く住んでみれば，いつのまにか頭でっかちになって作り上げていたムスリム像というものがどんどんと崩れていく．いろいろなムスリムがいてよい．違っていることから見えてくるものをひとつにつなげると，なにか像を結ぶのかもしれない．それを楽しみにして，オルケス・ムラユと踊り狂う島の人々を，頼もしく見ているのである．

参 照 文 献

田子内　進．1997．「ダンドゥットの成立と発展（Ⅰ）—近代演劇の成立とオルケス・ムラユ—」『東南アジア研究』35（1）：136-155．

インドネシアの華人文化

—時代は変わったのか？—

山　本　浩　子*

インドネシアでは，スハルト政権崩壊後の政治状況の変化によって，これまで禁止されていた中国式の獅子舞や龍舞を公の場で目にする機会が随分と増えた．ポピュラー・カルチャーにおいても，中国趣味が盛んに消費されている．

わたしが滞在するジャカルタ近くのタンゲラン（Tangerang）では，旧端午の節句祝いのドラゴンボートレース，ペチュン（爬船，*pehcun*）や，中国寺廟である文徳廟（*Boen Tek Bio*）の例祭が，スハルト時代以前の規模で再開された．こうした行事に顔をだすと，懐かしさとともに将来への希望，不安といったさまざまな感情が，華人参加者の間に交錯しているのを肌で感じる．

本エッセイでは，わたしがこの8ヶ月あまりのインドネシア滞在で華人文化について散見したことを，思いつくままに書いてみた

* 華人文化研究者，インドネシアの華人文化を研究するため，2000年初頭よりタンゲランに滞在中．

い．

「リリアンタウタウ」

ポスト・スハルトの子供ポップソング界に，上海出身でジャカルタ在住の少女について歌われた「リリアンタウタウ（Lie Lie An Taw Taw）」が登場し，かなりヒットした．出だしの「リリアンタウタウ，リリアンタウタウ」と2回繰り返されるフレーズが耳に残る佳作だ．日刊紙コンパスの読者投書欄にマレーシアで流行った子供ポップスの盗作だとあったが，当然のように制作者側は無視を決め込んでいる．いつものように，売れればそれでよいのだ．

歌うのはレオニー（Leony VH）という華人の女の子．12歳くらいだろうか．コメディードラマや子供番組の司会もこなす人気スターだ．これまでも子供歌手には華人が多かったのだが，歌手が華人だからといって，必ずしも「リリアンタウタウ」のように，歌うものに中国らしさが反映されるわけではなかった．

中国趣味が商業主義に利用されているのは明白なのだが，ヴィデオクリップで流される

写真1 「リリアンタウタウ」のカセットラベル

中国イメージがどんなに軽薄，紋切り型なものであろうと，この歌のヒットを喜ぶ華人が多くいるのも事実で，それはそれで喜ばしいことだと思う．それにしても，お手軽に中国趣味を盛り込んだからといって，カセットラベルの獅子舞に足が10本もあるのはどうしたことか．どこかで龍舞と混同してしまったのだろう．

リリアンタウタウに扮したレオニーの写真をみると，彼女はいわゆる中国服（こちらの華人はよく上海服と呼んでいる）にズボン姿．歌詞に「手には扇と日傘，お下げ髪でしなをつくって歩く」とあるから，かなりおしゃまなようだ．笑顔も性格も愛らしいので，隣りに住む「ぼく」「あたし」としては気になって仕方がない．できれば「上海に帰らないで」ずっとジャカルタに居て欲しい．「白い肌」のリリアンタウタウは，そのエキゾチックさゆえに，近所のお友達，そしてこの歌の消費者であるインドネシアの子供たちに，孫悟空やジェット・リーと同様に愛されているのだ．

歌の中間部では，「チチ」「ココ」（姉兄）たちも，彼女と「一緒にインドネシア文化を学びたい」との文句が繰り返される．この歌詞のことを，インドネシア生まれの華人歌手レオニーが，「完璧な」中国人少女リリアンタウタウの姿を借り，民族間理解を謳うものと解釈するのは容易い．実際に今年になって各所で頻繁に行われる華人文化紹介のイベントでは，文化交流を通じ，98年5月の（多くの華人が略奪，強姦，虐殺された）傷を乗り越えようとのスローガンが声高かつセン

チメンタルに叫ばれる．ただし，その声は主にプリブミ（土地のインドネシア人）側から発せられるものだ．

一方，タンゲランのペチュンや中国寺廟の例祭といった華人社会内部で復活した行事に目を向けると，そこには外部へ向けてのメッセージよりは，むしろ旧世代からレフォルマシ（改革）世代の華人に向けられたきわめて静かな喜びと期待を感じさせられる．それとともに，過度な中国色の露出は控えようとの抑制がまだまだ随所に存在することも感じさせられる．

中国趣味を利用しようとの商業主義的魂胆はさておき，「リリアンタウタウ」の歌を，レフォルマシ時代への華人側からのラブコールと読み解くことは可能だろうか．リリアンタウタウはインドネシア生まれの華人ではない．上海から来たばかりの小さな女の子である．であればこそ，「バリ舞踊を習いながらインドネシアに住みたい」と願いもする．過去の傷をすでに乗り越えてしまったかのように聞こえる歌詞を歌うのは，華人レオニーというよりは，あくまでもレオニー扮するところのリリアンタウタウである．新しい華人・プリブミ関係の到来を告げるかのような歌詞を聴くと，本当かしらと思いつつも，少し幸せな気分に浸る．と同時に，このような歌は所詮子供ポップスゆえに可能なのだろうと思うと，複雑な気持にもさせられるのである．

チオタオ

タンゲランには，自称7，8代も前に祖先がインドネシアにやってきたというプラナカン（インドネシア生まれの華人）が多く住む．彼らは独特の婚姻儀礼を有しており，チオタオ（*cio tao*）という．中国のどの地方の，どの時代の影響なのか検証することはできないが，チオタオの際，新郎新婦は一目で「中国風」と分かる衣装に身を包んでいる．作り物の弁髪や帽子の形などに，かろうじて清朝の風俗の影響があると分かる程度だ．

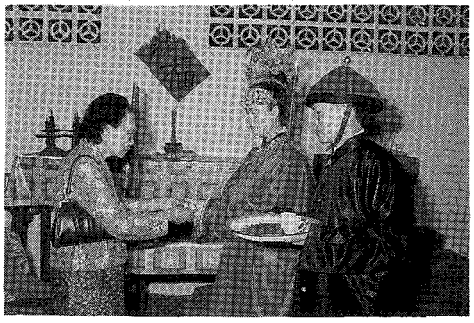

写真2　新郎新婦そろっての茶拝

天公（*tikong*）や先祖への礼拝，着付けの儀式などを含むチオタオを行うことで，タンゲランの華人としての「正しい」結婚が成立すると信じられている．この儀式で結ばれた夫婦は，死後もあの世で再び巡り会えるほどの強い絆で結ばれるのだという．チオタオに続いて，家族親戚と互いに茶を飲ませあう茶拝（*tehpai*）が行われる．

一方で，現在では，非合理的だという理由でチオタオを行わないカップルが増えてきている．チオタオが挙行されるとしても，この儀礼をタンゲランの華人としての自己確認の大きな拠り所としている両親の希望を容れ，行われる場合がほとんどだ．

わたしの滞在するタンゲラン郊外の田園地

帯は，古い生活スタイルを守る華人が比較的多い．それにもかかわらず，若い世代は，タンゲランの華人であることよりも，高等教育や専門性の高い職業によって，より普遍的な自己アイデンティティを確立することのほうが多くなってきている．

また，チオタオについて，タンゲランの下宿先の華人大学生が，「作り物の中国文化」と自嘲気味に言っていたことがある．ヴィデオCDの浸透で「本場の中国文化」を目にする機会が随分増えた今となっては，こうした反応も無理ないことだろう．

わたしはチオタオに見られる所作，道具，衣装の意味や由来に興味をもち，これについてタンゲランの華人に聞いてまわったことがある．しかし，そうすればするほど，それらを探ることは無意味ではないにしろ，あまり必要ないのではないかという気になった．自己流の解釈を上手に語ってくれる人はいても，結局は誰もはっきりしたことは知らない．言葉を変え，方向を変え質問を重ねると，最後は決まって「昔からこうしてきたので」という返事が返ってくる．

チオタオは，それを行う人がさしてその意味を理解することも詮索することもなく現在まで継承されてきており，かつタンゲランの華人の正統な結婚式だと認識されている．伝統は理屈抜きで受け継がれていくからこそ伝統であり，「本物」かどうかはさして問題ではないのだと改めて思った．「リリアンタウタウ」のビジュアルイメージに登場する10本足の獅子舞にも，これと似たようことが当てはまりそうだ．

「正しい」華人像をめぐって

華人のなかでも，特にマンダリン文化を志向するエリートには，チオタオのようなプラナカン文化を無視したがっているような印象を受ける．そして実際，中国の「正しい」やり方によってプラナカンの儀礼を修正していこうとする動きが見られる．たとえばタンゲランの孔子廟では，先祖供養や冠婚葬祭のやり方を，「正しい」儒教式に教育し直すことが熱心に行われている．それはたんに「正しい」儒教式にとどまるのではなく，実際には「正しい」儒教式＝「正しい」中国文化／華人文化というすり替えが，ここではしばしば起こっている．儒教を，イスラーム，キリスト教（プロテスタント），カトリック，ヒンドゥー教，仏教と並んで，政府公認の第6番目の宗教として認知させようとの動きが華人の間でますます熱を帯びているのも，こうしたすり替え思考と無関係ではない．

11月初めに内外の研究者を集めてジャカルタで開催されたプラナカンに関するセミナーでは，質疑応答の際，儒教団体などの一般参加の華人団体が，セミナー発表者に対し，インドネシア華人に関わる発表内容について修正を求める場面がしばしば見られた．同様のことが11月末に開かれたブタウィ文化と中国文化に関するセミナーでも見られた．ブタウィとはジャカルタを故地とする混淆出自の民族のことで，セミナーではこうしたブタウィ像の「修正」が求められ，これについてはブタウィのイスラムエリートが強硬だった．

部外者としての無責任な意見を言えば，「正しい」華人文化・華人像のようなものについて，華人社会全体でひとつのコンセンサスに達することがそれほど重要とは思えない．第一そんなことができるはずがない．チオタオで見たように，「正しい」ものを確定することなど不可能だからである．華人内で今まさに起こりつつある華人文化の理解をめぐる覇権争いには，またか，という印象しか受けない．というのも，スハルト時代にインドネシア各地で盛んに行われた官製エスニック・リヴァイヴァリズム（または再創造）の焼き直しを見ているようだからである．

スハルトの新秩序体制下で継子扱いにされてきた民族集団，華人なればこそ，当時とは異なるパラダイムで文化を思考して欲しいと思うのだが，これはわたしの思い上がった願いなのだろうか．